

ポルトガルの 友へ

モラエスの手紙

ヴェンセスラウ・デ・モラエス【著】

岡村多希子【編・訳】

彩流社



ハレの

反へ

モラエスの手紙

ヴェンセスラウ・デ・モラエス【著】

岡村多希子【編・訳】

彩流社



〈編訳者略歴〉

岡村多希子（おかむら たきこ）

1939年 東京都生れ。

東京外国語大学ポルトガル・ブラジル学科卒

専攻 ポルトガル文学・文化

現職 東京外国語大学教授

主訳書 「方舟」（彩流社）、「ポルトガル短篇選集」（彩流社）、「南蛮文化渡来記」（サイマル出版会）、「ウズ・ルジアダス」（共訳、岩波書店）、「東洋遍歴記・全3巻」（平凡社）、「十六・七世紀イエズス会日本報告書」（共訳、同朋舎）、「おヨネとコハル」（彩流社）、「モラエスの絵葉書書簡」（彩流社）、「日本精神」（彩流社）

ポルトガルの友へ・モラエスの手紙——ポルトガル文学叢書⑧

1997年2月10日 発行

定価は、カバーに表示してあります

著 者 ヴェンセスラウ・デ・モラエス

編訳者 岡 村 多 希 子

発行者 竹 内 淳 夫

発行所 株式会社 彩 流 社

〒102 東京都千代田区富士見2-2-2

電話03(3234)5931 FAX03(3234)5932

組版 (有) ポイントナイン

印刷 (株) 平 河 工 業 社

製本 (有) 青 木 製 本

Printed in Japan

落丁本・乱丁本はお取替いたします

ISBN 4-88202-432-2

序にかえて

異邦人でありながら、徳島を栖なる棲家に選び、滞日三十一年の後、徳島で朽ち果てたモラエスは、日本を世界に周知してくれた恩人でもあります。彼ぐらい人によって評価の分かれている人物はなく、彼の著書も読まずに、単なる漁色家ときめつける批評家もいたりします。

その年譜を見ても謎の部分が多いのです。例えば、海軍少佐となり、港務副司令官としてマカオ在勤中に、しばしば訪れていた日本に魅了され、現地妻にしていた中欧混血の亜珍と彼女との間に生まれた二人の息子をマカオに残したまま、一八九九年、神戸大阪ポルトガル領事として、日本に定住するのですが、母子を棄て去るほど非情な男だったのでしょうか。

神戸で芸者おヨネを落籍して同棲しますが、彼女の病没後の一九一三年に突如、神戸領事を辞任して徳島に隠棲した動機も大きな謎でした。徳島ではおヨネの姪コハルと同棲、コハルの没後も、なぜか徳島に踏みとどまり、徳島在住十六年後の一九二九年、七十五歳で没しているのです。こうした謎は従来、さまざま推測されてはきましたが、客観的資料に欠け、諸説の間にいくつもの違いがありました。それが今回、モラエスの三人の友人に宛てた私信を、東京外語大学の岡村多希子教授が大変なご努力で翻訳、分析され、謎が次々と説き明されました。

それによると、モラエスは意外に子供思いの愛情深い父親でした。亜珍から息子を引き離すことができない以上、いったん日本へ同伴しようとしたが、彼女のヒステリーが日本で恐ろしいスキャンダルを引き起こすことを案じたこと、母子をマカオに残したことに自責の念に悩まされ、日本から毎月仕送りを続け、母子とも生涯にわたって交渉があったことなどが分かります。

徳島隠棲の動機についても、モラエスの病気が浮かび上がります。モラエスには精神症の持病があり、絶えず病氣や死の不安にとらわれ、悩んでいた。唐突な公職辞任の決意は「心身とも完全に衰弱して回復の見込みがないため」になされたそうです。繊細な神経は傷つきやすく、他者との関わりによって傷つき、苦しむことが多いため、むしろ交流の不自由な異国の方が生きやすかった。徳島を選んだのは物価の安い地方都市であることのほかに、半生で最も穏やかで、安定したものであった神戸での生活の伴侶であったヨネの故郷であること、その家族の存在が大きく作用していたそうです。従来の俗説を正し得る資料の指摘に知的興奮さえ感じさせられます。

徳島での生活について「金は要らない。要るのは平安、静隠であり、これこそぼくの持っていないもの、決して達成できないであろうものだ。人生の晩年にあたった新たな試みだ」と友人に書いたモラエスは、母国ポルトガルをも見据えており、その内部事情を「教養ある人々の無知蒙昧、労働の伝統の欠如、列強の野心など……」と果敢に切り捨てています。

その一方で、日本人の長所として、①事物についての微妙な理解、②自然の優美さへの賛美、③どんな些細な仕事も芸術的才能を発揮と、三点を挙げています。

そして、自分自身は、愛憎のなかに個人生活を繰り捻げながらも（彼による彼自身の批評は、

半ば空想家、半ば愚か者の哀れな男ではあるが、他人に迷惑をかけないことを信条としている人間」とし、「浮沈の多い行き当たりばったりの人生」ながら、一人では生きることのできない人生の悲哀を噛みしめています。

私信という形なればこそ、モラエスの本音もまたあらわとなり、従順な優しさをベースにした女性を喝仰し、「いちばん悲しいのは、最後の瞬間にほえみかけてやる愛する女性をかたわらに持つことなしに死ななければならない」ことにためらいつつ、死の淵を迎える様子がまざまざと描かれています。

神経質であり、持病に悩まされ、エキセントリックな性格は治らないながらも、ポルトガルのかつての恋人イザベルにひれ伏し、亜珍とは正式に結婚こそしなかったが、最後まで母子の面倒をみ、おヨネ、コハルに追憶、追慕の情を絶やさぬ善人モラエス。この生き方は、現在の日本人に人生哲学の指針を与えているといっても言い過ぎではないと思う次第です。

最後になりましたが、資料収集と翻訳に大変な犠牲を払ってくださった岡村教授、そして「モラエスの絵葉書書簡」「日本精神」刊行に続いて、今回の本書発行に際し、ご支援をいただいた大同生命国際文化基金の各位に深甚な感謝を捧げるものであります。

一九九七年一月

モラエス会会長 石川 良彦

目次

訳者まえがき 7

セバステイアン・ペレス・ロドリゲスへの手紙 13

セルヴェイラ・デ・アルブケルケへの手紙 75

カルロス・カンポスへの手紙 147

訳者解説 237

目次

訳者まえがき 7

セバステイアン・ペレス・ロドリゲスへの手紙 13

セルヴェイラ・デ・アルブケルケへの手紙 75

カルロス・カンポスへの手紙 147

訳者解説 237

訳者まえがき

ヴェンセスラウ・デ・モラエスは非常に繊細な神経の持ち主であり、誇り高く傷つきやすいがゆえに傷つくことを恐れて、自分も他者の心のうちに踏み込まないかわりに、他者が近づくことをゆるさない、そのような人間であった。異常なほどの過敏な神経を自覚していたことが、彼に敢えて神戸や徳島に身を置かせ、いわば孤高の姿勢をとらせた。しかし、人はまったくの孤独のうちに生きることができない。モラエスの他者とのコミュニケーションは書くという行為であった。書くことは孤独の苦悩のカタルシスであった。作品のほかに、彼が膨大な量の手紙を家族、友人、知人に書き送っていたのは、そのためである。

私信は私信であるがゆえに、発信者の内的生活をうかがい知る貴重な伝記的資料になる。しかし、受信者との関係、心理的距離によって、話題の種類、取り上げ方が異なるので、生い立ち、家族との関係、愛情生活などを知るには、心の友に宛てたものでなければならぬ。ここに訳出した以下の私信は、まさにそのような類のものであり、モラエスについて従来流布していた俗説を正し得る高い資料的価値をもつものと信じる。

(1)セバステアン・ペレス・ロドリゲス宛二十七通（一八八八—一九一三年）

(2)セルヴェイラ・デ・アルブケルケ宛三十八通（一九一六—一九一九年）

(3)カルロス・カンボス宛三十七通（一八九九—一九一〇年）

(1) ロドリゲス宛私信

Sebastião Peres Rodrigues 氏、一八五九年に生まれ一九四四年に没した、コインブラ大学出の海軍軍医、モラエスのもっとも親しい友人の一人であった。熱心な共和主義者であり、一九一〇年の共和制樹立後、代議士をつとめるなどした。モラエスが彼と親交を結んだのは、一八八六年から翌年にかけてのモサンビークでの砲艦「ドーロ」乗務中。ザンジバルとの国境紛争にからむトゥンゲ湾出動の折には、余暇を利用して一緒に陸地に行き、イシサンゴからなる一帯の調査を行なったことは、よく知られている。モラエスがマカオに赴任後は、一八九五年にマカオで再会している。一九一三年のモラエスの徳島隠棲後、二人は絶交する。

ロドリゲスには、モラエスは家庭の秘密に属するようなことまでも打ち明け、さまざま私事を代行してもらっていた。この私信群から明らかにすることは、ほぼ次の四点である。一、モラエスのリスボンの家族、エミリアとフランシスカの生活の実態。二、マカオ港港務副司令官を辞任し神戸領事に就任するにいたる経緯。三、神戸に移り住むまでのマカオの亜珍との関係。四、徳島隠棲の事情。

前半の私信の多くは、日本に出張中に、中佐である自分をさしおいてタロネなる少佐が港務司令官に任命されたことで、自尊心を傷つけられたモラエスが、マカオ・ティモール州知事ガリヤ

ルド大佐の支持を得て、任務終了後もマカオに帰らず、ポルトガルの友人を通じて神戸領事に任命してもらうよう運動するなど、神戸領事就任にかかわるもの。思いどおりに事が進捗しないことに苛立ち、自分の将来、リスボンの家族、マカオの家族についてさまざまに揺れ動くモラエスの気持ちがなましく伝わってくる。

第十九信は、亜珍と息子たちについて告白したもので、(2)のアルブケルケ宛私信と併せて読むと興味ぶかい。

最後の第二十七信は、主文が徳島隠棲の半月前に、追伸部分が徳島に向かう恐らく前夜の七月二日に書かれている。徳島隠棲を決意した当時の彼の心理状態を知る貴重な資料である。

(2) アルブケルケ宛私信

António Luís Cerveira de Albuquerque e Castro は、一九一四年七月、モラエスの後任として神戸領事に任命されたポルトガルの外交官。一九一九年十一月まで神戸に勤務ののち、香港に転勤した。

モラエスは、神戸領事を辞任して徳島に隠棲するに際し、十五年間続けていた亜珍母子への仕送りをやめることを告げ、最後の贈り物として亜珍に八百パタカの小切手を送った。そして、母子に徳島の住所を知られないようにするためであろう、マカオと香港の知友には新しい住所を知らせなかった。マカオと香港からの通信はすべて従来どおり領事館宛に送られ、そこから改めて徳島に郵送されていた。アルブケルケへの私信のほとんどが、マカオあるいは香港からの手紙を

転送してもらったことに対するお礼の言葉で始まっているのは、そのためである。

アルブケルケは、神戸在勤中、少なくとも二回徳島のモラエスを訪ねている。来徳の目的のひとつは、年金受給の資格も何の権利もないモラエスの状況を正常化するため、一九一三年六月十日に本国大統領宛に送った領事辞任と軍籍離脱願を取り下げようモラエスを説得することにあつたらしい。

全体的には神戸の旧い知人たちの消息、ポルトガルの政情などを話題にしたものが多いこの私信群のうちの庄巻は、亜珍母子が登場する第三十三信以降であろう。一九一九年六月の初め、香港から亜珍と長男ジョゼが来日してモラエスに結婚を迫っているとアルブケルケから知らされ、モラエスはパニックに陥る。六月五日から三日間、亜珍は徳島のモラエス宅ですごし、迎えにきたジョゼと神戸に戻る。これらの書簡には、亜珍母子との関係、彼等に対するモラエスの奇怪とも言える感情が現れていて、興味ぶかい。

(3) カンポス宛私信

Carlos Campos は、モラエスのリセの同級生。友情が復活したのは一八九九年。彼の娘、マリア・ジョアキナ・カンポスとも、一九〇九年二月から文通を始めており、彼女との文通は一九一二年のカンポスの死亡後も、少なくともモラエスの死の一年前まで続けられた。

カンポスは、有力企業、ポルトガル煙草会社の社員で相当な地位にあり、裕福な生活を営んでいたらしい。健康を害していたのか、セトウーバルの景勝地、アゼイタンにある別荘ですごすほ

か、療養のため、北部にある温泉をしばしば訪れていた。カンポスは、モラエスの賛美者であり、私信のなかでモラエスは絶えず相手の褒め言葉を否定している。

文通が始まったのは、神戸領事に就任したばかりで、領事館運営がまだ軌道に乗っていなかった頃。その悩みをカンポスに訴える初期の書簡には、新たな領事生活の内情、具体的な給与の額や仕事の内容などに触れていて、面白い。だが、この私信群の特徴は、ポルトガルの政情や執筆活動についての話題のほかに、リセ時代の友人たちの消息と、それに関連して少年の頃の思い出がところどころにさしはさまれていることであろう。非常に私的なテーマを扱っているため理解しにくい面もあるとはいえ、リセ時代についてのモラエス自身の証言が他にほとんど存在しないところから、貴重な文献と言える。

セバスティアン・ペレス・ロドリゲスへの手紙



マカオ時代のモラエス

本文中の〔 〕は訳注を示す。